～被害者と共に考え、共に歩む～

vol.40

支援センターだより

平成27年11月21日(土)、静岡県男女共同参画センター「あざれあ」大ホールにおいて、静岡県・静岡県警察・静岡市との共催で、「犯罪被害者等支援講演会inしずおか2015」を開催しました。

第1部では、平成16年6月に長崎県佐世保市で起きた佐世保小6同級生殺害事件で、事件当時、毎日新聞佐世保支局長だった被害児童の父親　御手洗恭二(みたらいきょうじ)さんの部下で、事件当日から取材を続けてこられた川名壮志氏を講師にお招きし、『犯罪被害者と隣人』と題してご講演をいただき、被害児童の兄の当時の心境や加害少女に対する現在の想い、更に被害者に対する隣人としての役割の大きさ、犯罪被害者支援の必要性等を語っていただきました。(講演内容は、2頁から掲載)

第2部演奏会では、静岡県警察音楽隊の皆様にご出演いただき、素晴らしい演奏を披露していただき、盛大に講演会を開催することができました。

～ 目　次 ～

○ 『犯罪被害者と隣人』 講師:川名壮志氏
○ 平成27年相談受理状況・直接支援状況
○ 「犯罪被害者週間」広報用チラシ製作
○ 日本財団預保納付金支援事業取組状況
○ 賛助会費・寄付報告
○ 賛助会費・寄付納入者一覧、寄付等のお願い

静岡県公安委員会指定　犯罪被害者等早期援助団体
認定NPO法人(特定非営利活動法人)
静岡犯罪被害者支援センター
電話相談
054-651-1011
受付時間:10時00分～16時00分
(土・日・祝日・年末年始を除く)

『犯罪被害者と隣人』

講師　川名　壮志 氏（毎日新聞社　新聞記者）

◆はじめに

毎日新聞の千葉支局の川名と申します。私は2001年に毎日新聞社に入社しまして、今15年目の記者です。

今から話すのは、僕が4年目の駆け出しの新聞記者として体験した話です。新聞記者の話というより、駆け出しの社会人が体験した話と考えていただいた方がいいかもしれません。新聞記者として関った一方で、本当にごくプライベートな話が重なり合っています。その意味では、誰にでも起こりうる話ではないのかなと思っています。身近な話として聞いていただければとても嬉しいです。

僕が長崎の佐世保支局にいたのは2001年から2005年の5年間です。支局の記者は3人しかいませんでした。全国紙でも、支局の記者は少ないんですね。一人が支局長兼デスクのベテラン、御手洗さんという方。事件当時は僕が4年目の記者。その下に僕よりも若い2年目の男性記者がいて、この3人で支局で仕事をしていました。会社は3階建てで、1階が駐車場、2階が支局のスペースで、3階が支局長住宅。御手洗さんは数年前にガンで奥さんを亡くされていて、当時、中学校3年生の息子さんと小学校6年生のお嬢さんの怜美（さとみ）ちゃんと3人で3階で暮らしていました。

小所帯の支局ですから、社会面や一面のニュースを書くのは、年に1回あればいいほうで、地域版を埋めるニュースを書くのが日常でした。気楽な仕事といえば気楽な仕事なんですが。まだ独身だったので、夜は3階に上がって御手洗さんの手料理をご馳走になっていたりもしました。男の手料理なので、野菜炒めとかいり卵とかとりあえず肉が入っている炒め物とか大皿料理を作って、みんなで大皿を直箸で突いて食べるというような生活をしていたんです。テーブルには小学校6年生の怜美ちゃんがいて、中学校3年生のお兄さんがいて、ワイワイ、ガヤガヤ言いながら。

だから、支局全体が家族みたいだったんです。例えば小学校6年生の怜美ちゃんは、学校から帰って来るときも、自宅の3階に上がりませんでした。「ただいま」とドアを開けるのが2階の支局なんです。赤いランドセルを背負ったまま「ただいま」って。そんな牧歌的な生活をしているなかで、突然、怜美ちゃんが殺されてしまいました。

◆事件の一報、そして新聞記者として

事件がおきたのは、2004年6月1日、昼過ぎのことでした。「大久保小学校で、子供がケガをしたみたいです。救急車で運ばれたそうです」と、携帯電話に警察担当の後輩記者から電話が入ったのです。上ずった声だったので「えっ?」と思いました。後輩記者は佐世保警察署で情報を確認したというので、デマではないし、ウソでもない。でも、大久保小学校は、御手洗さんの娘さん、怜美ちゃんが通っている学校なんです。その後、もう一回、後輩記者から電話がかかってきて、「女の子、死んだみたいです」と言われました。

僕は完全に固まってしまいました。とにかく、支局に戻らないと何が起きるかわからないと、慌てて車で支局に帰ったんです。でも、支局に御手洗さんがいないんですよね。「何か変だ。何かいつもと違う」と思いながら、地に足が着かないような気持ちでいたら、支局にまた電話がかかってきたんです。

それは、御手洗さんからでした。御手洗さんは、たった一言、「怜美が死んだ」と。その言葉が、すごく抑揚がなくて、淡々としていて、感情が入ってないんですね。返す言葉がありませんでした。どれぐらい沈黙が流れたかわかりません。御手洗さんはもう一度「怜美が死んだ」と言いました。しばらくすると、御手洗さんが支局に戻ってきて、僕にまた言ったんです。「たぶんこれ事件だわ。会社に連絡して」と。

その時の顔が本当に能面のような顔で、表情が読み取れなくて……。人は自分の娘が亡くなったときにこんな顔をするのかなと、今から思うと不思議ですが、

本当に表情のない顔でした。それだけ言い残すと、御手洗さんは、僕の顔も見ずにとぼとぼと支局を出て警察署へ行ってしまったんです。僕は今でもその背中が忘れられません。

その後、慌てて本社に電話をかけたんですね。九州の本社は福岡にあって、福岡に電話をかけたんです。「御手洗さんの娘が亡くなりました。報道部長（本社のトップ）につないでください」と何度も言うんですが、報道部長につないでくれない。こっちは「早くしろよ。ふざけんな」と焦るばかりです。そのうち、事件担当のデスクが出てきて、「その事実って間違いないの?」と聞くんですね。「はい!間違いないです。御手洗さんが僕に言ったんですから」と答えたら、福岡のデスクは、「じゃあ、原稿を吹き込んで」と。「記事にしろ」ってことです。「えぇ!!」と思って、そのときは自分が新聞記者ということを忘れていたんですけれども、支局の時計を見たら、ちょうど午後1時半過ぎでした。夕刊の締切りギリギリなんですね。もう原稿をパソコンに打ち込んでいる時間さえないので、その場で原稿をそらんじろと言ったんですね。

足が震えました。「マジか」。怒りなのか、戸惑いなのか分からないですけども、体がガクガク震えるのが分かりました。結局、ほとんど記憶がないんですけれども、夕刊に記事を入れたんですね。それがこの記事です。

<左の記事>

小6女児、切られ死亡

佐世保の小学校 同級生がカッターで

1日午後0時56分ごろ、長崎県佐世保市奥六久保町の市立大久保小学校（児童数187人）から「小6の女児が同級生から刃物で切られ、死亡した」と佐世保署に通報があった。

切られたのは、同小6年で、同市大黒町、毎日新聞佐世保支局長、御手洗恭二さん（45）の長女怜美さん（12）。同署の調べでは体中に傷があり、凶器はカッターナイフだったという。

同小は市中心部にあり、市役所近くの高台に建っており、周辺は住宅地になっている。

この事件の加害者は、同級生の女の子でした。まだ11歳。最近話題になっている神戸の酒鬼薔薇少年が犯行時14歳でしたから、それよりも3歳下の女の子でした。

しかも、給食の時間に空き教室に怜美ちゃんを呼び出して、カッターで首を切りつけたんですね。それも、殺意を持っていた。殺すつもりだった。「どういうこと?」ってみんな思いますよね。事件の動機から、犯行態様から、計画性があったかどうか、少女はどんな育ち方をしたのか。あらゆるメディアが取材合戦に参加しました。先程も言いましたが、佐世保支局には3人しかいない。そこに続々と応援の記者が本社から集まってくる。みんな僕よりもベテランの記者でした。もう太刀打ちできないんです。僕自身、何がなんだかわからないまま、報道合戦の中に巻き込まれた気がしています。

それからは、もう記事がたくさん書かれることになって、これが6月2日、事件の翌日の朝刊です。<プロジェクターで記事を映し出す>もう連日、1面頭と社会面頭で記事が掲載される。やっぱり、インパクトがあったんだと思います。事件が起きて、小泉純一郎首相（当時）が「悲しいですね。再発しないように対応をしなくてはいけない」と記者団に語ってみたり、佐世保という小さな町が、いきなり首相官邸の方まで話が飛んでしまうような事件の現場になってしまった。その渦の中心に自分たちがいるということに、ものすごく違和感というか、何だか自分の足元がフワフワしている感じだったのを覚えています。

夕刊に電話で吹き込んでから、僕はもう完全に記事を書く側に回ってしまいました。被害者の「身内」ではなく、「記者」という立場に自分が置かれてしまった。それまでは上司と部下という関係で、怜美ちゃんとも夕飯を囲む間柄だったのに、いきなりもう事件の「被害者」としての御手洗さんの記事を書くという立場に、結果的に追い込まれてしまったというか、自分からそこに身を置いてしまったというか……。全くそこに対する意識を持たないままに、いつの間にか自分がそこにいることになってしまったという状況になってしまいました。事件取材で気が張っているときは、

何も考えられていないのでまだいいんですけれども、ちょっと気が抜けたときとか、ちょっとフッと思ったときに「自分は人でなしになってしまったな」とすごく思いました。それでも僕は、事件から審判が終わるまで100日ぐらい仕事を続けていて、1日も休んでいないんです。

先輩記者に言われて記憶に残っているのは「いい加減な報道されてみろ。報道で怜美ちゃんを二度殺すわけにはいかんのやぞ。だったらお前がちゃんと書け」と言われたことです。そうかもしれない、と思いました。でも、何度も記事に「亡くなった御手洗怜美さん」と書いても実感が湧かない。「御手洗怜美さん」と書かれた活字の怜美さんが、事件前に一緒に夕食を囲んだ怜美ちゃんと同じには感じられないんですよね。

なぜ現場を離れなかったのか。『いい加減な報道で二度殺すわけにはいかん』というのは、かっこいい理由なんですけども、すごくかっこ悪い理由としては、自分の身近な人が亡くなったことに対して、それを受け止めたくない、受け止められない、悲しみに引きずり込まれたくないという思いがあったんじゃないのかな、という気もしています。一緒に悲しんだら、僕は終わっちゃうんじゃないかなと。20代でしたし、恐かったんだと思います。恐くて仕方がなくて仕事をしていたというのが正直なところかな、と今は思っています。

加害者は11歳の女の子なので、少年審判にかかりました。刑事裁判ではないんですね。この子は刑罰の対象にさえならない。触法少年なので、法に触れるようなことをしても刑罰は科されないわけです。少年法じゃなくて、児童福祉法の対象になる。少年院にさえ入らずに、少女は厚生労働省管轄の「児童自立支援施設」という施設に入ったんですね。

家庭裁判所の決定通知を読むと「社会性や他者への共感が希薄で、怒りを適切に処理できないという特性が加害者にはあった。インターネットや交換ノートのいさかいで怒り、殺意を抱いた」と認定しているんですね。要は共感性が持てない特徴がある未熟な女の子が、インターネットやチャットでのトラブルや、交換日記での表現を巡って、勝手にキレてしまった。共感性を持てない女の子は、バトルロワイヤルなどの小説やホラーにも傾倒していて、人の死の感覚を持てないままに人を殺してしまったと書いているんですよね。身も蓋もないですよね。子どものケンカなのに、殺意を抱くなんてレベルではないのに人を殺してしまったということなんです。納得できるかというと、それは納得しきれないですよね。すごくわだかまりが残りますし、モヤモヤするんです。でも、世の中では色んな事件が起きているので、社会の関心は時間と共に薄れてしまうんですよね。

それでも、やっぱりモヤモヤするんです。少なくとも遺族にとっては、審判が終わりではない。僕は遺族ではないけれども、近くにいた人間としてその気持ちはすごくわかった。

◆加害少女の父親への取材

それで何をしたかというと、加害少女の父親を訪ねたんです。少年事件で、特に小さい子だと、親の責任が問われます。加害者の父親は山奥の一軒家に住んでいて、事件直後はマスコミが殺到したんですね。父親は一切しゃべりませんでした。僕が行ったのは、審判が終わって半年以上経ってからですけれど、誰も訪れる人はいない時期でした。山奥の一軒家で、暗い山道

を車で15分ぐらい登っていくんですね。玄関には裸電球がぶら下がっているだけ。「こんばんは」って言ったら、玄関の扉が開いたんです。でも、こちらは予想外で、何を話したらいいか分からない。最初は自己紹介で終わってしまいましたが、その後は何度も通いました。そうすると、段々、相手も気を許してくるんです。最初は玄関先で話していたのが、「寒いでしょう」と玄関口まで入れてくれたり、最後には居間まで通してくれて、コタツに入りながら話を聞く状況になったんです。

話題は時事ネタですとか、食事はどうしていますかとか、父親の生活の話を聞いたりするだけなんですが、そのうち向こうが僕を待つようになっていった。当時は一家離散していて、父親だけが自宅に残っていて、孤独だったんだと思います。僕が行くと話し相手になるから、家に招き入れた面がある気がします。ですが、こちらは何度も何度も会っているうちに、相手は怜美ちゃんを殺した女の子の父親なのに、何で会っているのか分からなくなってしまう。

一方で、相手は僕と御手洗さんとのつながりを感じて、どんどん距離を縮めてくるんです。例えば「御手洗さんにどう謝ればいいですか」とか「御手洗さんは自分のことをどう思っているんですか」と聞いてくる。その問いに僕は答える術を持っていないですし、答えられないですよね。また、答えたら御手洗さんへの裏切り行為のような感じもしていました。僕は被害者でも遺族でもない。そんな人間が、何かを言う権利があるのかなと。会えば会うほどどうしたらいいのか分からなくなってきて、一方で相手は気を許すので、事件の話もするようになってくるんです。

報道だと、インターネットのホラーサイトに傾倒したり、バトルロワイヤルに没入して、残虐なことに興味を持ち始めたとされているんですけれど、そのきっかけも報道が指摘しているんです。この少女はバスケットボールが好きで、友達と一緒にやっていたバスケットボール部を退部したことがきっかけだったと。辞めた理由は、親が「勉強しなければならないから、バスケットはダメ」と躾けたから、という記事が出ていました。それが原因とは言わないけど、やっぱりきっかけだったんじゃないか。親がそんなふうに躾が厳し過ぎたから、子どもに好きなことをやらせなかったからこんなことになっちゃったんじゃないか。そんな指摘もあって、僕もずっと知りたかったんですね。

でも父親の話を聞いていると、ちょっと違うんです。加害少女の自宅というのはすごく山奥にあって、学校からも離れた場所でした。大久保小学校は小さな学校で、全校児童で130人ぐらいしかいなかったんですが、その内でバス通学だったのが3、4人しかいなかった。少女は、その内の一人でした。バスケットは学校の体育館でやっていたんですけども、帰り道は本当に細い道で、高い木に覆われていて、暗い道なんですね。バスケットを辞めたのは冬のことだったんですけれど、冬の最終バスが午後6時。真っ暗なんですね。バスに乗り遅れると、歩いて帰られなければいけない。小学校6年生ですから年頃の女の子ですし、暗い夜道を一人で歩かせるわけにはいかなかった。だから「バスケットボールを辞めろ」と言ったと父親は話すんです。話を聞くと、加害少女の父親は、少なくとも加害少女に愛情を持っているんです。愛情の向け方が適当だったかは僕にはよく分かりませんけど、一切愛さなかったということとは別の話だったんです。それは、感覚的に半年会って分かることは分かるんですね。

父親に聞きたかったのは、どうしてあの子が事件を起こしたのかなんですが、父親も分からないんです。事件の前夜に、父親は加害少女に話しています。加害少女が読みたかった本があって、山奥で本屋にも行けないから、父親がインターネットを使って注文してあげたらしいんですね。「本を注文したよ」って言ったら、加害少女は屈託なく笑ったっていうんです。一方でその夜、彼女は父親が知らない間に、インターネットで御手洗怜美ちゃんを殺す方法を一生懸命、検索していた。この「乖離」が何だかよく分からないんです。それを分からなかった父親に責任があるか。僕には分からないとしか言いようがない。

加害少女の父親は、少女が産まれた直後に脳梗塞を

起こしていました。身体に障害が残ってしまって、障害者手帳を持っていました。そういう状況なので、母親はパートの仕事に出て、子どもの世話ができず、加害少女の世話は父親ができる範囲でしていたというのが、加害少女の家庭でした。父親は、「娘を見る時間が足りなかったのかもしれない。本当に申し訳ない」と僕に謝るんですよね。僕は謝られる立場にないのですが。この話は父親が引っ越してから、父親の了解を得て記事にしました。事件のやりきれなさは伝えることはできたのかな、と思っています。

◆兄の想い、父の想い

取材をしたくて、聞けなかった人がもう一人いました。

当時14歳で、僕も一緒に夕飯を囲んでいた、怜美ちゃんのお兄さんです。お兄さんは本当に怜美ちゃんと仲が良くて、いつも一緒に遊んでいました。3歳違いなんですが、まるで双子のようだった。それなのに妹が殺されてしまった。僕も何度か事件の後に中学生の制服姿のお兄さんを見かけたんですけれども、声がかけられませんでした。たぶん僕だけでなく、誰も声をかけられなくて、腫れ物に触るような存在でした。

元々そのお兄さんは、人見知りで、無口でもあったので、余計こちらとしても声の掛けようがなくて、どう接していいか分からなかった。ただ、何かやっぱりお兄さんの話を聞かなければいけないという気もしていたんです。ですが、僕、子どもの取材がすごく苦手なんです。何か怖いというか、踏み込み方が分からないんです。大人だったら冗談交えてきつい質問もできるんですけども、子どもはそういう大人のルールでしゃべることができない。自分の放った言葉が相手にどう突き刺さるのか、つかめないんです。

それでも、この佐世保の事件にあってからよく犯罪被害者の取材をするんですが、よく話題に上るのが被害者の兄弟の話なんです。家族の中で一番見過ごされがちで、かつ一番家庭内で触れられたくないテーマが、実は兄弟の話だったりするんです。そんなことも自分の頭の中にはあるものですから、やはりお兄さんに聞かなくてはいけないと思ったんです。ただ、やっぱり自信がないんですね。もし、自分の言葉で彼を傷つけてしまったら、自分には責任が負えないなとも思っていて、ずっと置き去りにしたテーマだったんです。だから、お兄さんが20歳になったら、お兄さんも自分の言葉に責任が持てるだろうと、そのときを待ったんです。それで彼が20歳になったときに、電話をして「話を聞いてもいいかな」と恐る恐る聞いたんですね。そしたら彼は「僕に話を聞きたいといったのは川名さんが初めてです。今まで、誰も僕の声なんかに耳を傾けてもくれませんでしたから。」と。「えっ!」て。このすれ違いって何なんだろうって。こちらは聞けないと思っていたのに、お兄さんは誰も聞いてこないと思っていた。びっくりしました。

実は怜美ちゃんのお兄さんというのは、事件のことを誰よりもよく知っていたんです。怜美ちゃんと仲が良かったのはもちろん、怜美ちゃんの友達とも仲が良かったんですね。家によく遊びにきていたからだと思います。

お兄さんは、インターネットでのトラブルや交換日記でのいさかいがあったことを、怜美ちゃんから事前に知らされていました。お父さんである御手洗さんは一切知らなかったのに。さらに怜美ちゃんに「トラブルに遭っているんだけども、どうしたらいい?」と相談もされていたんです。お兄さんはその加害者の女の子のことも、よく家に遊びに来ていたから知っていたと言うんですね。一緒にテレビゲームで遊んだこともあった。だから事件があって、同級生の女の子と言われたときに「あの子か」と思ったと言うんです。あのトラブルがあの事件に発展しちゃったんだなと思ったんだそうです。でも、それを14歳のときから20歳なるまで誰にもしゃべらなかった。

事件が記憶にある方は、父親である御手洗さんが、すごく立派な方のように見えたと思うんですね。テレビや新聞で見ていると。すごく真摯に事件とも向き合って、自分の考え尽くした言葉をメディアに語る人だと

いう風に。でも一旦家に帰ると、お兄さんから見た父親は全然違ったというんですね。お兄さんと二人でいるときは、もう目の焦点が合っていなかったって。怜美ちゃんの遺体を見たときに、御手洗さんは人の目を気にすることもなく号泣していて、身体を震わせていたって言うんですね。大声を上げて泣く父親を見たときに、お兄さんは「俺は泣いちゃダメだ。俺が泣いたら、お父さんはもっと苦しむ」と思ってしまったそうです。そして、御手洗さんが号泣する姿を見て、「親父は死んじゃうんじゃないかな」とも感じたらしいんです。後追いで自殺しちゃうんじゃないかって。そんな状況で自分まで迷惑をかけちゃいけないと、自分自身の感情に蓋をしてしまうんですね。

取材して思うんですが、子どもの凄さというのは、こういうところじゃないかなと思うんです。大人が思っている以上に状況を良く見ていて、状況に対応してしまう。でも、そんなこと良いわけないんですよね。中学を卒業したお兄さんは、福岡の高校に入学します。その時、溜まっていたバケツの水が全部ひっくり返ってしまった。入学直後から、教室に行けなくなりました。保健室通いが続きます。でも、親を心配させるからとそれを言わないわけですね。で、親は気付かない。結局、学校に行けなくなって、半年後にお兄さんは中退します。そこで漸く御手洗さんが気付いて、臨床心理士や精神科医巡りが始まります。

でも、その時のお兄さんの気持ちを聞くと「臨床心理士も精神科医も結果的には役に立たなかった。自分の頭の中で巡っていることを言語化できなかった。確かに話したいことがある。でも、話したいことを言葉にできない。それを伝えたくてもその言葉がない」という状況だったそうです。

そこに良くも悪くも新聞記者の僕が電話をかけてきた。当然、僕も聞くのが怖いんですが、やっぱり聞きたいって思いがあって、図々しく聞いたんですね。すると、お兄さんは、時間をかけて話すことによって、自分がどういうことに苦しんでいたのか分かったと言うんです。30時間、40時間と聞いたと思うんですが、それを全部テープ起こしして、お兄さんに見せてあげました。お兄さんは自分が話したことが活字化されているのを読んで、初めて心の中が整理できたそうです。「そういうことが、あり得るのか」と驚きました。

お兄さんの言葉で、すごく印象に残っている言葉があります。それは、加害少女に向けた言葉です。加害少女をお兄さんは知っていて、一方でお兄ちゃんは怜美ちゃんとものすごく仲が良かった。この残酷な事実をどう整理しているのか知りたくて「加害少女に何か言いたいことがある?」って聞いたんです。お兄さんは「普通に生きてほしい」と。びっくりして「だって、怜美ちゃんを殺した子だよ」と言葉を重ねて訊ねると「でも、そうなんです」と。ずっとお兄さん自身も苦しんでいて、結局そういう風に思っちゃったって言うんですね。「自分が何事もないようにこれから生きるためには、それが一番いいんじゃないか」って。

「だから、もしその加害少女が、謝りたいんだったら、いつでもいいよ。謝るなら、いつでもおいで」って。そこには、ひ弱な14歳の少年の姿はなく、しなやかに強く成長したお兄さんの姿がありました。これはきちんと伝えなければいけない。そう強く思いました。それで本を書いたんですね。それが『謝るなら、いつでもおいで』(集英社)という本です。長くなりましたが、本を出版したことが、今日この講演に招かれた理由です。

『謝るなら、いつでもおいで』っていう本のタイトルなんですけども、このタイトルはお兄ちゃんが書いてくれました。そのときに「たくさんの人に自分の想いを知ってほしい」と言われたので、ここで改めて紹介します。

◆『隣人』だからこそできること

だいぶ時間が過ぎていますので、まとめに入りますが、今回のテーマは『犯罪被害者と隣人』です。僕は被害者の身内でもないし、被害者でも遺族でもありません。せいぜい隣人です。でも、犯罪被害者の取材をしていて最近感じるのは、「隣人には隣人の役割がある」ということです。例えば加害者の父親の話をしましたけれども、被害者と加害者との関係で言うと、弁護士の存在はすごく大きいです。被害者、加害者双方の弁護士同士が、この先どうすればいいか話し合う。専門のことですからその辺のことは詳しいですし、真摯に向き合えば、不要な摩擦って起きないんですよね。当事者同士ができないことを、弁護士がする。これは別に弁護士だけじゃなく、警察も一緒だと思います。捜査をする主体でもあり、被害者支援をする警察だからこそ、被害者と加害者の間に立ってできることがあると思います。

当事者同士というのは、加害者と被害者の関係でもきついですし、同じ被害者同士でもきついんですね。被害者でも家族同士で話をするのは、この御手洗さん一家に限らず、犯罪被害者の方の話を聞いても、大変なことだと感じます。極限にいる人と、また同じ極限にいる人が話し合っても、辛すぎて、救いが見出せないというか。逆に赤の他人だからこそ話せるっていうことがきっとあるんだと思います。

事件から3年経った時に、御手洗さんが毎日新聞で小さなコラムを書いています。『千の風になって』(新井満訳詞・作曲)という歌に触れたコラムです。

「受け入れがたい現実に直面した時、人は心をどう保つのだろうか。3年前の今日、娘を失った。多くの励ましや慰めの中に『死者からのメッセージ』に曲をつけたCDがあった。死んだ人が残された人に、自分は死んでなんかいない、姿を変えて周りにいる、と伝えていた。何を言っているのだと反発した。が、いつしか繰り返し聴く自分がいた。ある時、娘の写真を見ていた友人が言った。『いなくなって悲しいという気持ちは消えないだろうけど、幸せな思い出をたくさんもらったって思えないかな』。ふざけるなと、その時は思った。でも何かが心に引っかかった。

ある朝、ベランダに見慣れない小鳥が来た。はっとした。あのCD「千の風になって」の、鳥になって残した人を目覚めさせる、という内容がよみがえった。姿を変えて来てくれたのか?動悸が激しくなるのが分かった。時は何も解決してくれない。ただ友人の言葉を振り返り、CDを聞き返す度に感じている。少しずつでしか、心は現実に折り合いをつけられないと」

友人というのは、御手洗さんの会社の後輩です。友人は怜美ちゃんのこともよく知っている人でした。事件直後に身の回りの世話をしていた人なんです。犯罪被害者の隣人の存在というのは、すごく大事で、隣人にしか言えないことって、あるのだと思います。隣人にしか言えなくて、隣人だから言えること。そういうことが、きっとあると思う。隣人が隣人として、犯罪に遭った被害者に向かい合う。これは、実は『犯罪被害者支援』をするにあたって、とても大切なことだと感じています。それを伝えたくて、恥ずかしながら今日は講演をさせていただきました。ご清聴どうもありがとうございました。

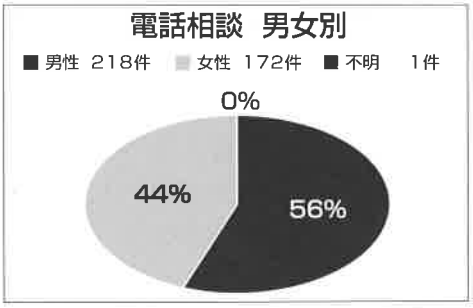
平成27年　相談受理状況

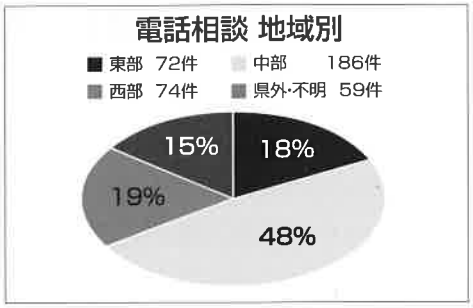
（平成27年1月1日～平成27年12月31日）

1. 受理件数

（件）

相談内訳	件数	件数
電話相談	391	75
面接相談	20	△4
法律相談	16	△1
合計	427	70

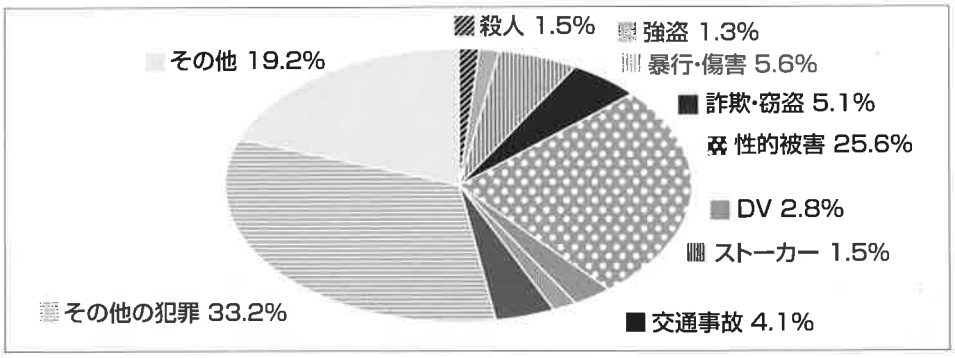




2. 電話相談内容

（件）

内容区分	件数	前年比
殺人	6	△2
強盗	5	5
暴行・傷害	22	1
詐欺・窃盗	20	7
性的被害	100	43
虐待	0	0
DV	11	△3
ストーカー	6	△6
交通事故	16	8
その他の犯罪	130	2
その他	75	20
合計	391	75



〈特徴・傾向〉

◇　事件取扱いの警察署からの紹介や電車・バスにおける車内広告・車内放送の効果もあり、相談件数が増加した。

◇　特に、強姦や強制わいせつ被害に遭われた方やご家族からの相談が多く、カウンセリングや法律相談へ移行したケースが目立った。

◇　相談内容によっては、行政担当窓口に協力要請する等、他機関への引継ぎもスムーズに行うことができた。

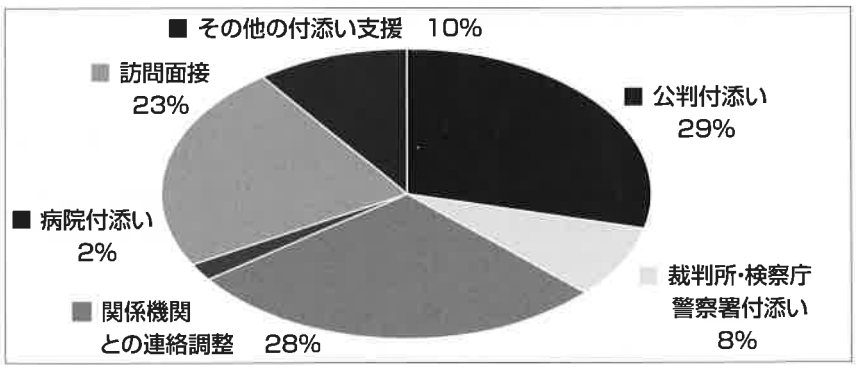
平成27年　直接的支援状況

（平成27年1月1日～平成27年12月31日）

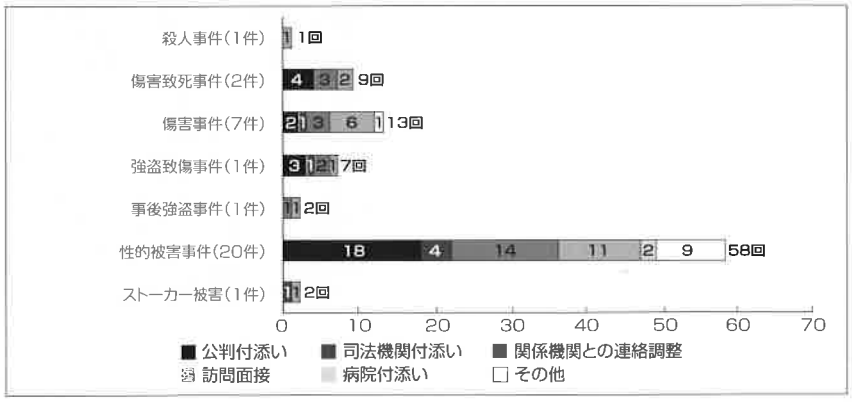
1. 支援件数

（件）

支援内容	支援件数	前年比
公判付添い	27	△14
裁判所・検察庁・警察署付添い	7	△6
関係機関との連絡調整	26	△15
病院付添い	2	△1
訪問面接	21	△12
その他の付添い支援	9	3
合計	92	△45



2. 事件別件数及び実施回数



3. 情報受理端緒別

（件）

警察情報	22(17)
相談から移行	14(14)
その他	2(2)
合計	38(33)

※（　）内は、直支移行件数。

4. 地域別

（件）

東部	8
中部	12
西部	11
県外	2
合計	33

〈特徴・傾向〉

◇　強姦・強制わいせつ事件の支援が多くなっているが、事件発生直後や相談受理からまだ間もないこともあり、公判付添い支援にまだ至っていない事案ばかりであるため、支援件数は多くない。

◇　性的被害事件に係る支援活動件数が全体の6割を占めており、管轄の警察署と連携を取り、防犯ブザーを交付する等し、被害者の再被害防止対策も強化していきたい。

赤い羽根共同募金　静岡県共同募金会「広域福祉活動」助成事業

「犯罪被害者週間」広報用チラシの製作

この程、静岡県共同募金会から助成をいただき、「犯罪被害者週間（11/25～12/1）」用の広報チラシを5,000枚製作し、期間中に実施しました広報活動の際に、多くの方々に配布し、犯罪被害者支援を呼びかけることができました。

まだ犯罪被害者支援や当支援センターの存在をご存知ない方も多くいらっしゃるかと思いますので、皆様方のお力添えをいただきながら積極的に広報活動を展開していきたいと思います。

【県警音楽隊ロビーコンサート】

【JR静岡駅街頭キャンペーン】

【JR浜松駅街頭キャンペーン】

～皆様からの募金により、広報活動を行うことができました。心より感謝申し上げます～

「日本財団預保納付金支援事業」取組状況

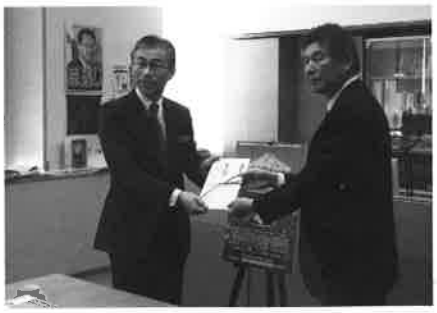
日本財団から助成金を請け、平成27年4月から「団体運営の自立に向けた仕組みづくり」事業と「犯罪被害者等支援のための資機材整備」事業を実施しております。事業内容といたしましては、

① ファンドレイジング活動の実施
（新規賛助会員等の拡大、ホンデリング活動の実施　等）
② 電車・バスへの車内広告の掲出並びに車内放送の実施
③ 情報漏洩防止のためのセキュリティ強化とシステム構築

を実施してきました。①につきましては、新たに賛助会員に加入していただいた方やホンデリング活動への協力者が前年に比べ増加し、財政基盤安定化に向けて少しずつではありますが、成果を上げることができました。

また、②については、ポスターを見た方や放送を聴かれた方からの相談が寄せられる等、広報効果もあり、相談・支援件数が増加しました。③のセキュリティ対策としてパソコン周辺機器を整備し、個人情報等管理の徹底に努めることができました。

今後も増加する相談や支援活動が継続実施できるよう、財政基盤の構築をめざした取り組みも積極的に実施し、安心・信頼していただける支援センターであり続けたいと考えます。



静岡トヨペット 様

セキスイハイム東海 様

静岡県警察刑事OB会 様

静岡県中部質屋協同組合 様

静岡県警察カレンダー製作実行委員会 様

小國神社 様

～広がる・支える犯罪被害者支援の輪～

【寄付型自動販売機】

売上寄付期間:平成27年1月～12月

○サントリービバレッジ 19台 179,788円

矢崎エナジーシステム㈱静岡支店、光サービス、かの川商店、サントリービバレッジ(浜松支店・三島支店)、オオイカメラ、㈱静岡新聞社、㈲高野コミュニティー(高野マンション・高野コーポ)、赤阪鐵工所(豊田工場・センタービル・中港工場、㈱クサナギ)、溝口病院、SBSマイホームセンター袋井展示場、やまふじ、㈲三田製作所、中部運転免許センター2台

○米久ベンディング 2台 16,190円

JA富士市ホワイトパレス、SBSマイホームセンター藤枝展示場

○ダイドー 8台 293,886円

古庄自動車学校、静岡県交通安全協会、㈱橋本組、岩水寺、藤野建設㈱滝沢現場、県営住宅やよい団地F棟建設工事現場、小林建設御殿場営業所、芙蓉ビル

○信濃商事 1台 6,406円

SBSマイホームセンター静岡東展示場

○全国被害者支援ネットワーク 2台 2,582円

オムロンフィールドエンジニアリング、オムロンビジネスアソシエイツ㈱三島事業所

【ホンデリング】

売上寄付期間:平成27年1月～12月

寄付金額 273,856円

1年間で141件のご協力をいただき、寄付金として頂戴しました。

また、12月からはホンデリング・プロジェクト協力企業の㈱バリューブックスの企画により、「年末年始特別キャンペーン」として、通常の買取価格20%UPと書き損じハガキ換金を実施していただき、多くの方にご協力をいただきました。今後も、このようなキャンペーンが実施される際には、ご協力をお願いします。

この他にも切手やテレホンカードの寄付もいただき、管理費に充てさせていただいております。

こうして皆様方に支えられて犯罪被害者支援活動ができておりますことを、深く感謝申し上げます。

支援センターの運営を支えてくださる皆様

～こころより感謝申し上げます～

平成27年6月16日～平成28年1月31日

アイウエオ順（敬称は略させていただきました。）

青木　則子	熱川防犯協会	熱海ガス㈱	熱海警察署
(一社)熱海市観光協会	熱海商工会議所	熱海地区安全運転管理協会	阿部　智恵
綾部　哲雄	安全運転センター	株式会社アンドーカーパーツ	㈱石井組
石山　峯義	石割　誠	伊豆市役所	伊豆遊技場組合
磯部　三恵	(一財)市川交通安全財団	㈱伊藤園静岡相良工場	伊東ガス㈱
いなば食品㈱	猪之原　勝美	磐田遊技業組合	内山　隆司
遠藤　るみ子	大河原運送㈱	大多和　清美	大庭　茂利
大仁警察署	大村　裕二	小笠運送㈱	小楠　和男
小國神社	尾崎　たか	小柳津　茂助	掛川警察署
掛川商工会議所	勝山　靖久	加藤　好子	上川　陽子
河井　榮	河合　竜司	川崎工業㈱	川嶋　晃
菊川警察署	菊川地区安全運転管理協会	菊池　英明	工藤　佳子
栗田　友莉	コーニングジャパン㈱	湖西地区安全運転管理協会	小坂　博
奥水　誠司	御殿場警察署	後藤　千代子	小林　暁
小林建設㈱	小林　武子	小林テレビ設備㈱	近藤鋼材㈱
櫻井　宏	澤木　久雄	静岡ガス㈱	静岡県経済農業協同組合連合会
静岡県警察学校	静岡県警察カレンダー製作委員会	静岡県警察官友の会	静岡県警察官友の会大仁支部
静岡県警察官友の会菊川支部	静岡県警察官友の会静岡南支部	静岡県警察官友の会島田支部	静岡県警察官友の会沼津支部
静岡県警察官友の会富士支部	静岡県警察官友の会牧之原支部	静岡県警察官友の会三島支部	静岡県警察刑事OB会有志一同
静岡県警察交通OB会	(一財)静岡県警察職員互助会	静岡県警察本部科学捜査研究所	静岡県警察本部鑑識課
静岡県警察本部教養課	静岡県警察本部教養課・職場教養・第一・第二係	静岡県警察本部警察相談課	静岡県警察本部施設課
静岡県警察本部総務部	静岡県警察本部通信司令室	静岡県警察本部通信指令課指令第2係	静岡県警察本部ヤングリーダー研修会参加者一同
(一財)静岡県警備業協会	(一社)静岡県警友会	静岡県公営競技連絡協議会	(一財)静岡県交通安全協会
静岡県交通安全協会熱海地区支部	静岡県交通安全協会湖西地区支部	静岡県交通安全協会菊川地区支部	静岡県交通安全協会天竜地区支部
静岡県交通安全協会沼津地区支部	静岡県交通安全協会浜松東地区支部	静岡県交通安全協会袋井地区支部	静岡県交通安全協会藤枝地区支部
静岡県交通安全協会富士地区支部	静岡県交通安全協会焼津地区支部	(一社)静岡県ゴルフ場協会	静岡県中部質屋協同組合
静岡県自転車軽自動車商業協同組合	(公社)静岡県柔道整復師会	静岡県農協暴力・防犯対策協議会	(公社)静岡県防犯協会連合会
静岡市自治会連合会	静岡市清水区自治会連合会	静岡市遊技業組合	静岡信用金庫
静岡中央警察署	静岡中央地区安全運転管理協会	静岡鉄道㈱	静岡不動産㈱
静岡南警察署パパママ子育て同好会	静岡南警友会	静岡リビング新聞社	島田警察署
清水遊技業防犯組合	(一社)下田市観光協会	下田地区安全運転管理協会	下田有線テレビ放送㈱
シャクリー工業日本㈱	㈱シャンソン化粧品	㈱白井産業藤枝DC	㈱白鳥建設
新興港運㈱	鈴木　龍恵	鈴木　智子	鈴木　礼子
鈴与㈱	裾野ライオンズクラブ	スルガ銀行	医療法人十全会聖明病院
医療法人社団青虎会	セキスイハイム東海㈱	曽我　一洋	髙須　珠美
髙田　好浩	竹内　良訓	田中　広子	玉川　隆全
中部運転免許センター	中部電力㈱静岡支店	坪井　邦彰	㈱テンイチ
㈱天文本店	天竜警察署	天竜地区安全運転管理協会	㈱土井酒造場
東遠遊技業組合	東海ワッチサービス㈱	冨永　秀幸	㈱中村組
ナガヤ㈱	仁科　喜世志	日本軽金属㈱蒲原製造所	沼津警友会
沼津警察署	沼津駿東遊技場組合	野島　恵美子	範子のおでん
浜北警察署	浜松東警察署	浜松信用金庫	早川　育子
早坂　しおり	原木　英三	伴　信彦	宗教法人日限地蔵尊
一杉　泰博	袋井警察署	藤枝警察署	藤枝警察署支援の輪
藤枝市自治会連合会	藤枝遊技業組合	富士岳南ライオンズクラブ	富士商工会議所
(一財)富士心身リハビリテーション研究所	富士宮警察署	富士宮市区長会	富士宮中央ライオンズクラブ
富士宮ライオンズクラブ	芙蓉監査法人	㈱芙蓉リサーチ	(一財)星いきいき社会福祉財団
星野　健兒	細江警察署	ホテルセンチュリー静岡	㈱ホンダカーズ静岡
前林　孝一良	牧之原警友会	㈱マキヤ	増田　たかひろ
松澤　紘一郎	松本　喜代子	松谷　清	㈱マルカワ
丸山　博之	㈲万邦自動車	三島警察署	三島市自治会連合会
三島商工会議所	三島信用金庫	三島地区保護司会	三島遊技場組合
宮澤　正美	㈱モガワ	望月　俊郎	望月　威男
森　則夫	焼津警察署	焼津市遊技業組合	焼津信用金庫
焼津地区安全運転管理協会	㈱ヤマエイ長島建設	山本　正幸	良知　淳行
若澤　和夫	鷲巣　洋子	渡辺　忠昭	渡邊　弥生
割鞘　健太郎	匿名38名		

《賛助会員・寄付のお願い》

静岡犯罪被害者支援センターの活動は、皆様の寄付金等で支えられています。
当支援センターの主な活動として、電話相談、直接的支援、支援員の養成・研修、広報啓発活動等を行っています。
被害者支援活動の趣旨にご賛同いただき、ご支援ご協力をお願いいたします。

賛助会費

法人・団体	1口	10,000円以上
個人	1口	2,000円以上

賛助会員の方々には、広報誌「支援センターだより」などをお送りしています。
また、被害者支援講演会等のイベントを開催する際には事前にお知らせいたします。

【振込口座】　郵便振替:口座番号　00870-7-50944
【加入者名】　NPO法人静岡犯罪被害者支援センター

ホームページアドレス
http://www.shizuoka-hhsc.jp

後援　静岡県警察本部
静岡県犯罪被害者支援連絡協議会

発　　行　認定NPO法人
静岡犯罪被害者支援センター
〒420-0032
静岡市葵区両替町1-4-15 芙蓉ビル4階
発　行　月　平成28年 3月